



Holly FURNEAUX,

*Queer Dickens: Erotics, Families, Masculinities*

(ix + 282 頁, Oxford University Press, 2009 年 12 月)

ISBN: 9780199566099

(評) 市川千恵子

Chieko ICHIKAWA

ヴィクトリア朝の家庭崇拜主義の隆盛期に活躍したチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の作品の多くには、時代の家族観とは対照的な形の家族が提示されている。ヴィクトリア朝中期の指南書において繰り返された、家という単位における父親の権威を頂点に、精神的に家族を支える母親、そして天使のごとき愛くるしい子供たち、という構図は、ヴィクトリア朝の人々の理想に過ぎなかったことは疑うまでもないであろう。家庭崇拜主義の隆盛期は父親の権威の失墜期と重なるというジョン・トッシュ (John Tosh) の *A Man's Place* (1999) における指摘を考慮すれば、家族をめぐる価値観は絶えず流動的であったと言わざるをえないのである。ホリー・ファーノー (Holly Furneaux) 著 *Queer Dickens* は、ディケンズの作品に描かれた男性同士の関係に焦点を当て、ディケンズ研究の新たな地平を切り開く意欲作である。

タイトルが示すように、著者は作品の読解にクィア批評を援用しているものの、理論に過度に依存せず、大量の一次文献を駆使し、ディケンズのクィアな要素を掘り起こしている。一次文献と二次文献の提示のバランスの良さも本書の特徴として指摘しておきたい。クィア批評といえば、イヴ・コソフスキー・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) の *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (1985) から始まり、同著者による *Epistemology of the Closet* (1990)、並びにジュディス・バトラー (Judith Butler) の *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (1990) が中心となって、文学作品におけるセクシュアリティの表象の読みをラディカルに変えてきた。セジウィックの“homosocial”な欲望は、資本主義的家父長制における男たちによる女の交換をも含意するが、クィアな欲望とは総じて家庭崇拜主義から逸脱した場所にあるとされてきた。だが、ファーノーは歴史的資料をもとにディケンズ作品におけるクィアな要素を検証するうえで、クィアという概念を家庭（厳密には擬似的な枠組み）の内側に配置して再定義を試み、さらにセジウィックの理論では暴力性を秘めた男性同士の関係を親密さや愛情から捉えなおそうとする。作者の

説明によると、本書が意図するのは、作品のなかでディケンズが提示した婚姻外及び非血縁関係の人々によって構成される家族の諸相と、そのなかに潜在する同性愛的要素を検証し、さらに、時代の家族崇拜や異性愛主義に対するディケンズの批判精神を読み解くことである。では、次に各章の概要をおさえておきたい。

第1章と第2章に共通する意図は、“bachelorhood”に焦点を絞って、(生殖による)家族の再生産を重視する時代の異性愛イデオロギーに対するディケンズの挑戦を浮き彫りにするということであろう。第1章は、独身男性による養子縁組のプロットにクリアな要素を見出している。英国において養子縁組法が整備されるのは1926年であるから、それ以前の養子縁組は厳密な法手続きのもとで行われていたわけではないようだ。ここで具体的に取り上げられる作品は『オリヴァー・トゥイスト』(1837-39)である。著者はオリヴァーを男性だけの空間へ引き取り、養育するミスター・ブラウンロウを“bachelor dad”の格好の例とみなし、この人物造形のモデルを“the Foundling Hospital”の図書館員で、かつ捨て子をテーマにした物語の作者でもあるジョン・ブラウンロウ(John Brownlow, 1800-73)とみる。さらにブラウンロウの小説 *Hans Sloane* (1831) と『ニコラス・ニクルビー』(1838-39)の共通項として、ともに家族の再生産の不安定さが提示される点を挙げている。また、『大いなる遺産』におけるジョー・ガージャリーの家庭の内部では、婚姻が異性愛主義の制度として機能していないと論じられる。男性による少年の養子縁組のプロットは、男女の結婚の結びつきの限界を提示しており、新たな形の家族を構成するうえでのクリアな動機づけになっていると指摘して、第1章が閉じられる。だが、著者が前提とする男性だけの家庭的な結びつきに潜むエロティックな様相が、こうした養子縁組からは見えにくいように筆者には思われた。著者は昨今のディケンズ作品の映像化のなかで、養子縁組のプロットに幼児愛が描かれた例を挙げて、テキストに書きこまれたエロティックな欲望の解釈の可能性を補足するが、この点に関してはさらなる議論が必要であろう。

第2章で中心となるのは個人の生と性の選択としての“bachelorhood”である。まず、著者はディケンズが人生の選択肢としての“bachelor life”を好意的に描いているとみなし、それを婚姻と家庭の結びつきへの抵抗であり、旧来の家庭とは別の形のケアの空間の創造と新たな家族の提示だと示唆する。具体的に例をあげれば、『二都物語』において、他人の家で世話をされる老齢の独身男性ミスター・ロリーが、結婚せずに家庭的な生活を享受することと、ミス・プロスとの会話の中で、彼が「生まれながらのbachelor」であることが強調されていることから、著者が示唆するのは、結婚を通して独身男性が得られ

る“rehabilitation”といった時代の文化的な期待とは大きく異なるディケンズの独身男性をめぐる視点である。19世紀中葉にウィリアム・グレグ（William Greg）は論説“The Social Sores of Britain”（1867）において、男性の独身期間の長期化を社会悪の一つの要素をみなし、さらに世紀末の性科学の議論においては独身という選択にも同性愛の可能性が指摘された。だが、時代の独身男性のセクシュアリティへの批判的な観点とディケンズの視点との違いを著者は次のように論じている。

Dickens's naturalization and valorization of Lorry's single status clearly demonstrates his resistance to the idea that identity is sexual identity and his appreciation of the insufficiency of marriage as the exclusive mechanism for domestic fulfilment. (80)

さらに、この章の後半では、第1章でやや過不足を感じたエロティックな欲望の読みに説得力が増す。『ピックウィック・クラブ』や『互いの友』における“bachelorhood”と彼らの結婚に対する嫌悪感との関係を考察し、著者はディケンズが婚姻という形式への抵抗を異性愛嫌悪のひとつの表現とみなしていたと論じる。『ハンフリー親方の時計』において“narrative club”に集う独身男性は子供好きで、ときに病人の世話もする。こうした男性の集団は擬似的な家族の要素を含み、『骨董屋』や『ピックウィック・クラブ』においても繰り返されるモチーフである。両テキストでは婚姻による物語の結末というヴィクトリア朝小説のコンヴェンションは破られる。男性同士の家庭を指向する中流階級独身男性は、女性ではなく、男性の使用人を好むという点にもディケンズが描く家庭の“homosocial/homosexual”な様相を見出すことができるだろう。ミスター・ピックウィックとトニー・ウェラーの両者が婚姻への嫌悪感を抱いていることから、ディケンズの作品では階級を横断して異性愛主義の否定が読み取れることを作者は明らかにする。ミスター・ピックウィックの反異性愛主義の描写にはコミカルな要素が付随するものの、強制的異性愛主義を否定する彼の立場を、その自己感覚の核におく語り手のシリアスな言及によって作者が注意深く強化しているという指摘は重要であろう。ミスター・ピックウィックが貫く独身生活は、性の選択でもあり、彼の魅力的な使用人への思慕には同性愛的な要素が存在することを著者は付け加える。また、『互いの友』においても、同性愛的な要素を裏付ける例として、ユージーンが友人のモーティマーに対して、“Touch my face with yours, in case I should not hold out until you come back. I love you Mortimer”と述べる部分を引用し、男性同士の身体的接触による性的快楽の暗示と解釈している。

第3章では、義理の兄弟という関係のなかに男性同士の結束とエロティックな欲望の存続という形を見出している。メアリー・エリザベス・ブラッドン(Mary Elizabeth Braddon)の *Lady Audley's Secret* (1862) において、行方不明の友人ジョージ・タルボーイ (George Talboys) を追跡する主人公のロバート・オードリー (Robert Audley) の同性愛的要素が、タルボーイズの姿に酷似した妹に性的に惹かれるという点でさらに強化されることは、すでにアン・チェトコヴィッチ (Ann Cvetkovich) が *Mixed Feelings* (1992) において論じている。ファーノーはディケンズの作品のなかで、男性の友人同士が、どちらかの男性に身体的に(あるいは性格や物腰が)酷似した妹と結婚することで、異性愛というイデオロギーの枠組みの中に、ホモエロティックな欲望が存続することを考察する。例えば、『ピックウィック・クラブ』ではベン・アレンとボブ・ソーヤーの少年時代から続く友人関係は、ボブとベンと妹アラベラとの結婚によって、公私ともに強化されることになるのだ。これを「婚姻内にある婚姻」とみなす指摘は興味深い。さらに、『マーティン・チャズルウィット』においても、ジョンのルースに対する愛情は、彼のトムへの思いの投影でもあり、彼女との結婚によって「ねつ造された」義理の兄弟として二人の結びつきが永遠に保証されるのである。ここで挙げられた両作品においては、二人の男性、そしてどちらかの妹という三角関係が婚姻のなかに存在することになる。作者はこの関係性を『マーティン・チャズルウィット』の食事のシーンから分析する。「食べる」という行為自体が性的要素と切り離せないことは言うまでもないが、トムとジョンに食事をもてなすルースの姿は、男性同士の関係における仲介役という彼女の役割を象徴するという指摘は刺激的である。だが、筆者としては擬似的な婚姻に巻き込まれた女性の位置についてさらなる議論が聞きたいという思いに駆られた。

第4章は、ここまで論じられてきた「家」あるいは「国内」(“at home”) から離れ、帝国に視野を広げる。ロバート・ハイアム (Ronald Hyam) が *Empire and Sexuality* (1991) において帝国を英国男性の性的欲望の昇華の場と論じたように、帝国は家庭崇拜主義からの逃げ場を男性に提供してきた。著者はディケンズの作品における帝国もまた、家庭崇拜イデオロギーにからめとられた社会に対するアンチテーゼ、またはそうした社会からの逃避の場であると捉えている。まず初めに焦点を当てられるのが、『ピックウィック・クラブ』に描かれた男性同士のカップル(ジョブとジンゲル、ベンとボブ)による移住の物語である。パラレルに語られる二組の親密な関係は、結婚と移住の「エロティックな類似」を示唆し、移住は英国の家庭崇拜主義の外でのみ実現可能なホモエロティックな経験と欲望の充足のための選択肢のひとつとして位置づけられるの

である。また、章の終わりで論じられるのが『大いなる遺産』での結末をめぐる原稿の修正に読み取れるピップのクィアな要素である。構想の段階では彼のエジプト生活は8年であったが、11年へと延長されることに著者は注目する。また、イギリスに戻ったピップがエステラの結婚を知ること、読者は彼が「家庭的」な充足を求めて、再びエジプトへと旅立つことを予測するのであるが、著者は原案と出版された作品の両方に主人公の結婚への抵抗を読み取る。ビディに結婚を勧められても、彼はハーバートとクララとの共同生活に満足しており、“I have so settled down in their home, that it’s not at all likely. I am already quite an old bachelor” と切り返す。この発言は次のように解釈されている。

The reference to marriage as institution rather than any potential wife exposes the emptiness of this social proscription, combining suggestively with Pip’s self-designation as an ‘old bachelor’ to emphasize his departure from a model of family constituted by marriage. (174)

さらに主人公の同性愛的傾向はクララと結婚するハーバートに対する思いの吐露 (“he would not have undone [...] for all the money in the pocket book”) にも示される。エジプトの地でピップとハーバートの再会の祝福に満ちた描写、異性愛主義の婚姻生活に対する両者の消極的態度、親密な友人の結婚生活に入り込むことによる共同生活と、テキストの中に書きこまれたクィアな要素はつきない。エジプトは家庭崇拝主義のイギリスでは不可能な主人公の欲望を充足させる “queer signifier” (175) として機能しているのである。この章では本著の射程にはない女性同士の愛についても触れられる。フランスやイタリアはディケンズの作品では「リビドー的な場所」(161) と捉えて、『リトル・ドリット』の登場人物でレズビアン要素が見出せるミス・ウェイドのフランス各地を転々とする地理的移動を因習的な社会への抵抗の表れと読む。“homosexual exile” の物語に書きこまれたエロティックな欲望を緻密に読み解く著者の行為は、国内において実現しえない欲望を可視化させるのである。

第5章は再びドメスティックな場所に戻り、“male nursing” を中心に、看護という行為に潜むエロティックな欲望を考察する。1990年代にミリアム・ベイリン (Miriam Bailin)、キャサリン・ジャッド (Catherin Judd)、アリソン・バッシュフォード (Alison Bashford) らは、文学作品における病室や看護の表象にセクシュアリティ、ジェンダー、階級の問題を読み取ってきたが、いずれも女性による男性への看護行為が中心であった。近代看護の改革者であるフローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale) は、看護を女性の聖性と自律を融合させた女性のための専門職と位置付けようとした。しかし、他者の身



体に触れる行為は、ときに看護される側にエロティックな幻想をかきたて、看護は聖と性の相反するイメージを体現する仕事として表象されることも少なかつたのである。著者はディケンズの小説における男性による男性に対する看護をめぐる語りが、階級、ジェンダー、セクシュアリティの境界を横断する、もしくは複雑化するという前提のもとに、男性による看護の読みの可能性を探っていく。著者によれば、ディケンズの作品では治癒のための接触が身体を超えて、精神的な傷や不和をも癒す理想的な行為として提示されている。男性による男性への看護の表象における階級とジェンダーの境界の横断、もしくは攪乱というメタファーが特に読み取りやすい例は、『マーティン・チャズルウィット』におけるマーティンとマークのお互いの看護であろう。看病によって、同じ病が人から人へとうつり、nurse と patient の関係は逆転する。両者の身体的接触が増すことによって、さらなる親密な関係性が構築されることになるのだ。看護にはヴィクトリア朝の女性に求められた徳目としての他者への思いやり、道徳的な影響力といった要素が含まれるものの、ディケンズの小説においては、男性にもそうした美德が女性的な特質ではなく、むしろ「男らしさ」として付与されているのである。マークによる看護にはマーティンの道徳的再生という要素が存在し、さらに両者の階級の境界も取り除かれることになる。だが、男性の看護によるエロティックな欲望については、『大いなる遺産』の分析のほうが明快だ。ピップとハーバートの殴り合いのシーンに続くのが後者による前者への看病である。ハーバートに“Look at me”, “Touch me” と呼びかけるピップの言葉には、彼の性的興奮が示唆されている。著者が指摘するように、暴力的な身体の接触から、癒しのための接触へとダイナミックに展開する男性同士の親密な関係に、エロティックな欲望を読み取ることは十分に可能であろう。

さらに続けて最終章（第6章）においても、男性同士による癒しのための身体的接触に潜む欲望が多面的に照射される。前章との関連からも、ジェンダーの境界の侵犯的行為という点でも、『大いなる遺産』におけるジョーによるピップの看病に対する議論が興味深い。オーリック やミセス・ジョーから暴力を受けて負傷するピップを身体的かつ精神的に癒すのは、ジョーの“great good hands”である。高熱で寝込むピップを看病する際のジョーの手際の良さは、まさにナイティンゲルが *Notes on Nursing* (1859) で推奨した看護の担い手としての模範的な行為である。マルコム・アンドリュース (Malcolm Andrews) 著 *Dickens and the Grown Up Child* (1994) によると、ディケンズはナイティンゲルの仕事に意識的であり、作品の構想メモでは、ジョーを“Ministering Angel”として描写していた。ファーノーが指摘するように、ジョーの看護にはナイテ

インゲールが定義した女性の務めとしての看護の模倣と、同時にジェンダーの枠を超えた要素が見出せるのだ。著者は、ジョーの男性的な身体や強さと女性的な手の感触や優しさを描写する言葉を丁寧にとりあげて、ジェンダーの境界の曖昧さとして解釈する。ディケンズ作品における男性による「癒し」の行為は、女性化を意味するのではなく、理想的な男性の美徳として描かれていると言えるだろう。この章の後半は、アメリカの市民戦争のさなかに *Harpers Magazine* に連載された『大いなる遺産』を国家の文化的・政治的コンテキストのなかでとらえる作業と、ディケンズ作品の愛読者であったアメリカの作家ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) が自らの陸軍病院慰問の経験を記録した *Specimen Days* (1882-83) に焦点を当て、素人男性の「癒し」やホイットマンによる男性患者の身体への愛着といった要素を論じ、この数年重視されている transatlantic な研究が指向されている。

以上のように、ファーナーの *Queer Dickens* は、ホモエロティックな欲望を家庭的な枠組みで捉えなおし、男性による看護の表象からジェンダー、階級、セクシュアリティという概念に対するディケンズの革新的な試みを浮き彫りにする。一次文献の精緻な読みとともに、二次文献の量の多さにも感心する。セクシュアリティや家庭崇拜主義をめぐるのは、1980年代後半以降重要であるとされる研究書は完全に網羅されている。本著はすでに多面的に照射されてきたディケンズの作品世界の新たな研究の方向性を示唆する一冊と位置付けてよいであろう。

最後に著者が序文で断っているように、女性同士の関係は本著の守備範囲にはないのだが、男たちの“homosocial/homosexual”な関係から排除された女たちの関係も筆者にとり興味深い問題である。ちなみにシャロン・マーカス (Sharon Marcus) が *Between Women: Friendship, Desire, and Marriage in Victorian England* (2007) の一部において、『大いなる遺産』のミス・ハヴィシヤムとエステラの関係にエロティックな読みの可能性を指摘していることを付記しておく。